

沖縄県内におけるイリドウイルス病の発生状況

【要約】 平成6年からイリドウイルス病の発生状況を整理し、養殖対象魚に広く発生し、発生の盛期は6月から10月頃までの高水温期であることが分かった。また、周辺海域の影響を受けて沖縄県内産種苗にも陽性例が見られた。

水産試験場 増殖室				連絡先		098-994-3593	
部会名	水産	専門	水族病理	対象	マダイ等養殖魚類	分類	行政

【背景・ねらい】

沖縄県内のマダイ養殖生産量は平成6年の223トン/年を最高に減少し、平成12年は109トン/年である(図1、農林水産統計から)。この生産量の減少原因の1つとして、平成5年頃から県内で発生しているイリドウイルス病が考えられる。そこで、県内での発生状況について詳しく検討した。

【成果の内容・特徴】

- ①. イリドウイルス病の検査方法は平成6と7年は脾臓スタンプ標本のギムザ染色、平成8,9,及び10年はイリドウイルスモノクローナル抗体を用いた蛍光抗体法、平成10年以降は(独)養殖研究所で開発されたPCR法を用いて検査している。そして、不顕性感染魚の確認はPCR法が有効であることが分かった。
- ②. イリドウイルス病はマダイ、ヤイトハタ、スギ、ハマフエフキ、及びその他の魚種(マルコバン、ブリ、マグロ、スジアラ、ヒレナガカンパチ、チンシラー)で確認し、広い魚種に感染する。そして、比較的感受性の高い魚種はマダイ、ヤイトハタ、マグロ、及びマルコバンで、スギとハマフエフキは比較的抵抗性が強いものと思われる(魚病研究36(1))。
- ③. 養殖場での発生時期は6月以降夏季が中心で、11~12月頃まで影響が残ることが予想される。
- ④. 沖縄県内で生産した種苗でのイリドウイルス検査結果では魚種に関係なく、6月以降生産した種苗で陽性例が見られ、周辺海域でのイリドウイルス病の発生の影響を受けていることが推測される。

【成果の活用面・留意点】

- ①. イリドウイルス病の感染は不顕性感染魚からの水平感染であることが疑われている。
- ②. 本病に対する種苗生産施設でのより積極的な対策を検討する必要があるが飼育施設、使用海水のみでなく親魚、餌生物まで考慮しなければならないので容易ではない。
- ③. 夏季のイリドウイルス病流行期を避けるため可能な限り種苗生産時期を前にスライドすることが望ましい。

【具体的データ】

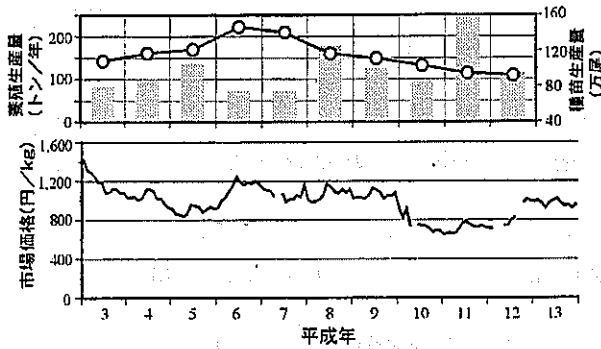


図1 マダイ養殖生産量、栽培センター種苗生産量、及び築地活〆市場価格の推移

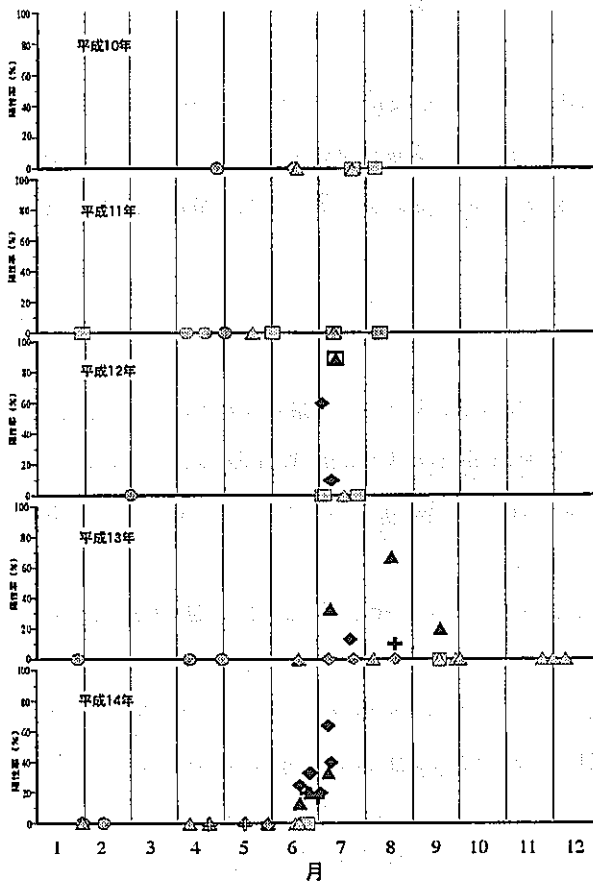


図2 沖縄県内で生産された種苗のイリドウイルス検査結果
(○:マダイ、□:ヤイトハタ、△:スギ、
◇:ハマフエフキ、+ : 其他の魚種)

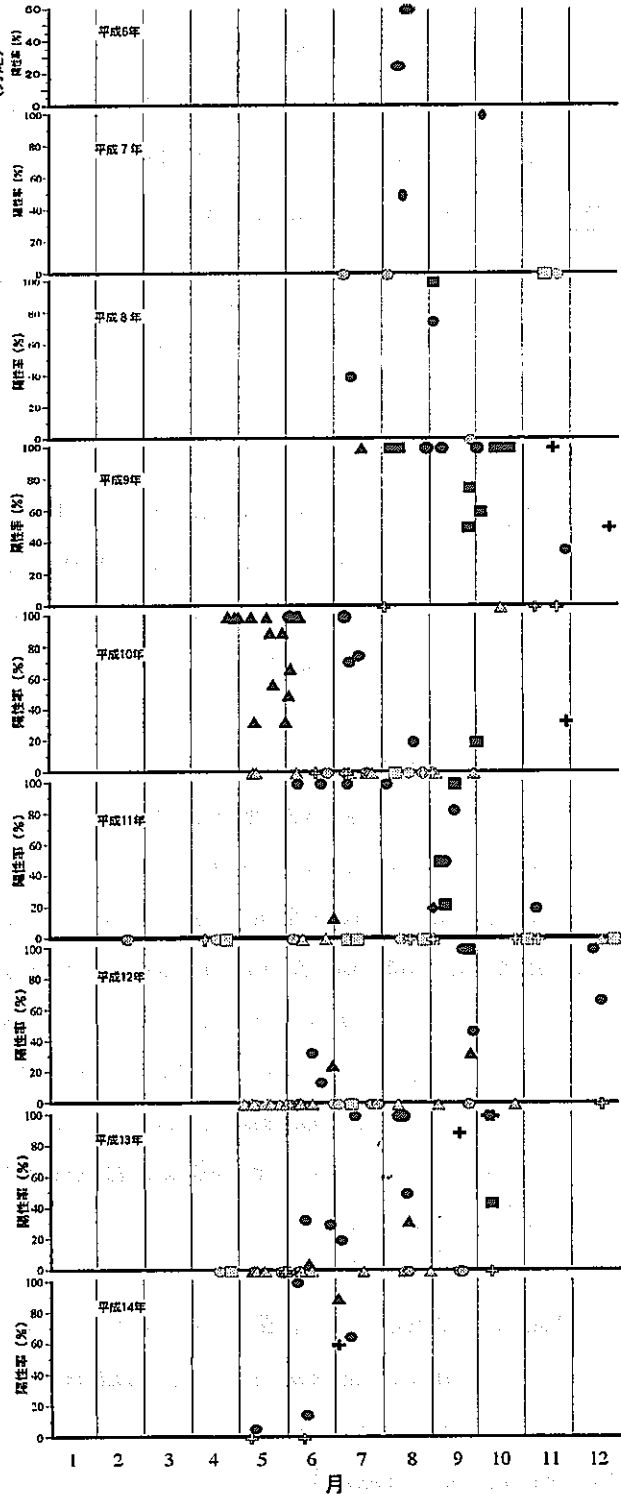


図3 沖縄県内養殖場でのイリドウイルス検査状況
(○:マダイ、□:ヤイトハタ、△:スギ、
◇:ハマフエフキ、+ : 其他の魚種)

【その他】

研究課題名：魚類等防疫対策試験、
養殖魚介類の耐病性試験

予算区分：県単

研究期間：平成14年度（平成6～14年度）

研究担当者：杉山昭博、熊谷明子

発表論文等：平成13年度沖縄県水産試験場事業報告書